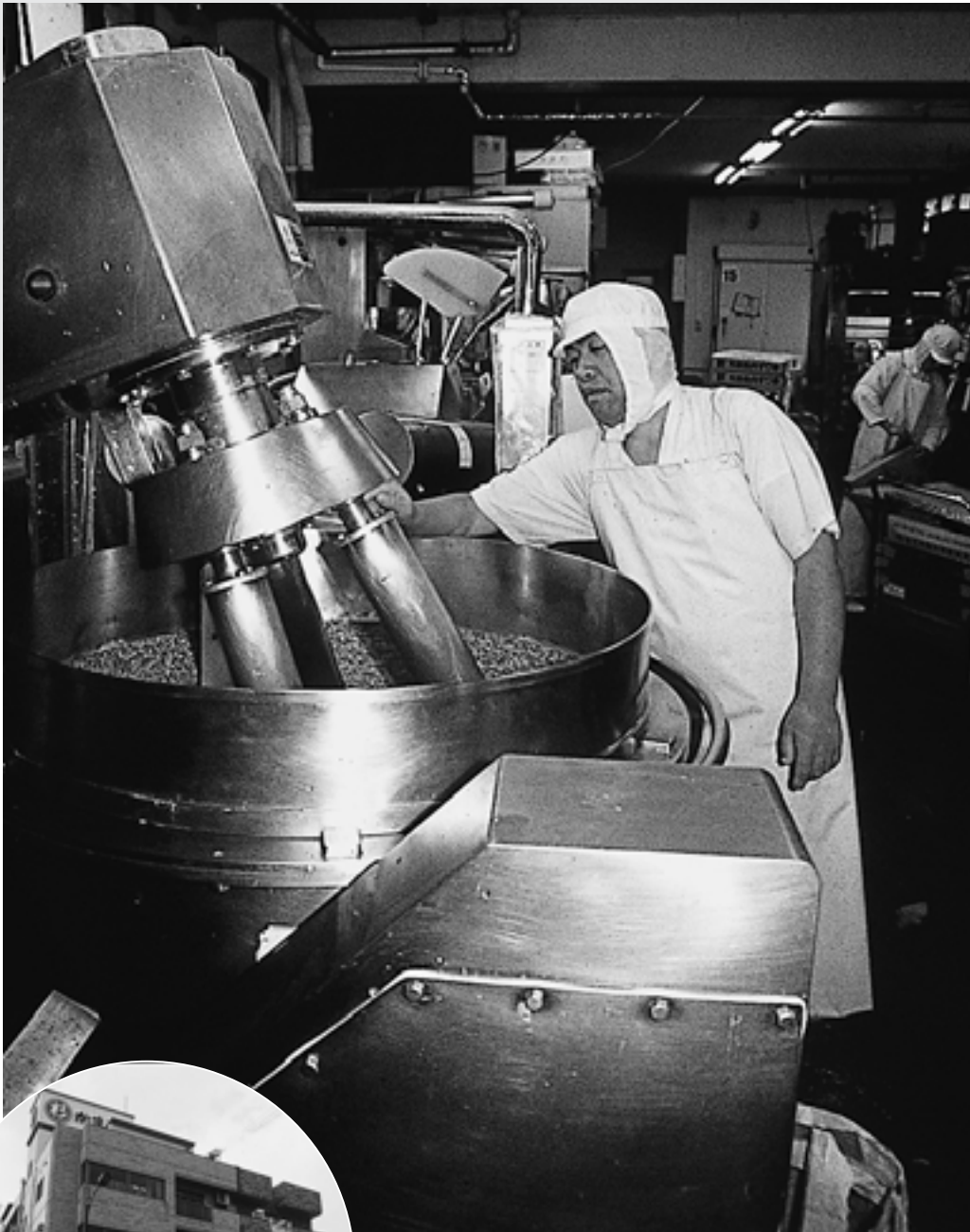


おいしいかまぼこを
つくっているのは、私たち

— 有限会社杉永蒲鉾 —

職 場
ル ポ



EMPLOYMENT REPORT

(文) 清原れい子 (写真) 小山博孝



有限会社杉永蒲鉾

〒850-0046 長崎市幸町 6 - 18

TEL 095 - 820 - 1230 FAX 095 - 820 - 1222

かまぼこづくりに
かけて四十年

また一つ、強烈な出会いがあった。「有限会社杉永蒲鉾」を創業した社長の杉永金生さん。おしいかまぼこづくり一筋。夜中に起き、日中仮眠をとり、夜七時まで現場で働く。一個五〇円の世界で、今期の売り上げ予想は一二億三、〇〇〇万円超。バブルがはじけた不況のなかで、毎年一億円ずつ売り上げを伸ばしている。

そのかまぼこづくりに、「知的障害者」たちが携わっている。社長曰く、「障害者という言葉が気に入らん。あの人たちがおらんかったら、うちの会社はなりたたん。障害者なんて書かないで、すばらしい職場に貢献と書いてよ」。

表現のしようがないので、「知的障害者」とカッコをつけたが、社長の思いがうまく伝わるかどうか。

製品総数は一二〇〜一三〇種類で、揚げかまぼこが七〇%、蒸したかまぼこなどが二〇%、竹輪が一〇%。「ほんもの」をつくってれば、どんな時代が来ても怖くはない。会社がつぶれるのは、経営者の責任だ。後ほど社長語録をご紹介しますが、迫力に圧倒されそう……。

杉永金生さんは、一九三八年生まれの六三歳。長崎県島原市出身で、中学校卒



杉永金生社長

業後、長崎市内のかまぼこ店に就職し、先輩職人のいじめなど筆舌に尽くしがたい苦労をしながら、かまぼこづくりを習得して、六〇年に独立。八六年に「有限会社杉永蒲鉾」を設立した。

長崎駅から歩いて十数分のところに、魚が跳ねる看板が目印の「杉永かまぼこ」の売店と工場がある。会社案内には、次のように記されている。

——頑固なまでの職人気質が、一つひとつの蒲鉾に魂をこめて、「素材を生かす商品づくり」「必要なものは惜しまず加える」という信念のもと、「おいしい物だけ」を作りたてでお届けします——

絶妙なコンビ
社長と常務の出会い

常務の谷本和久さんと杉永社長が出会ったのは、二十七〜二十八年前のことだった。福岡県大牟田市出身の谷本さん

は、銀行員として入行後初めて地元を離れ、長崎市内の支店に転勤してきた。「あいさつまわりに飛び込んだら、かまぼこ工場ですから、バケツの水を私のズボンの裾にかかるくらいまくんです。表情は穏やかにがまんしましたが、新調したばかりの背広なのに内心ムカッとしました。でも、『失礼な！』と思いがらも、どこかフイーリングは合ったのでしようね」

銀行員と取引先という付き合いから、徐々に親交が深まって、谷本さんが二度目に長崎市に着任したとき、社長から口説かれた。

「俺がうまいかまぼこをつくる。右腕になって、売るほうをやってくれ」。ちょうど支店長への発令待ちをしていた。

「ありがたいことだけれど、だいぶ悩みました。社長は

一代でここまでやってきた実績がある。銀行員として大勢の社長にお会いしまし



谷本和久常務取締役

だが、この人はすごいと思っていました。男が男にほれるというのでしょいか、お金より仕事だと飛び込みました」

当時、九一年の杉永蒲鋒の社員は約三〇名。大手銀行から「小企業」への転職だった。

「それまでのお付き合いで経営状況はわかっていましたし、社長がこれだけ働けば、会社がつぶれることはないと思っ
ていました」

「動と静」「激と穏」。一見、両極端に見えるお二人は、それから二人三脚で力を発揮する。社長が製品をつくり、谷本さんが販売先を開拓。三〜四億円だった年間売上高は、毎年一億円ずつ伸びて一二億円を超え、社員も八〇名にふえた。

「根本は、社長がおいしいかまぼこをつくっているからです。お客さんは、いいものなら買ってくれます。一二億は小さく見えるかもしれませんが、一個が五〇円の世界です。かまぼこでは、生産量は長崎県でトップ、利益は九州でトップです」
単純計算すると年に二、四〇〇万個、一日八万個という膨大な数になる。長崎県は、東シナ海にかけて好漁場に恵まれ、新鮮な魚がたくさん獲れる。原料はイワシ、アジの青物が中心だ。

「かつては寒い季節が忙しかったのですが、いまは年中忙しいですね。社長は、おいしいと言われるかまぼこづくりに徹していますから、うちの製品は加水

をしていないんです。量をふやすために、水をよけいに加えたりデンプンを加えたりすると、魚本来の味がなくなっていくますから、加水はしないほうがいいんです」

これまでのヒット商品は、揚げかまぼこの中に豆腐、ニンジン、ゴボウ、キクラゲ、枝豆などを入れた「あげだし」と、イワシとタマネギでつくった「イワシバーグ」。築地中央卸売市場を中心に全国の主要卸売市場や食品卸商社・問屋などに販売し、いまや北海道まで。東京のホテルのおつまみや煮物にも使われている。価格を一度下げると値崩れするからと、特売はしない。

商社で修業をした社長の息子の清悟さんが専務に就任して、営業を担当。谷本さんは、いまは総務・人事・経理を中心にみている。

一生懸命働く人たちがいるからこそ

杉永蒲鋒で、知的に障害がある人たちが働き始めたのは三十年以上前のことだ。家内工業的につくっていたころ、親戚から就職を頼まれたのが吉田保さんで、勤続三十二年になる。

仕事の段取りは、今日まで社長自らが教えてきた。

「その人の特性、個性を、社長がうま

くつかんています。比較的レベルが高い人が多いと思いますが、親から頼まれて、最初は何もできなかった人も、どこかに働ける場所を探しています」

病気などで辞めた人はいるが、定着はよく、いままでに三人が労働大臣表彰（当時）を受けた。

全員が男性で、現在働いている一人のうち九人は、谷本さんの入社後に入った人たちだ。

「出勤カードの扱い方を教えてもなかなかできないとか、ちょっとしたことではありますが、私のほうではそう困ることはないですね」

最近、長崎能力開発センターから事前に職場実習を受け入れ、採用するケースが多い。実習期間中、雲仙から徒歩と電車で片道三時間かけて通ったというガッツの持ち主、竹林敏さんには、「三時間かかってでも仕事をしたいという努力を認めてやりたい」と社長も脱帽。念願かなって今年四月から正社員になった。



勤続32年になる吉田保さん(55歳)。優秀勤労障害者として労働大臣表彰(当時)された



新人の竹林敏さん(21歳)。早く仕事を覚えて先輩たちに追いつきたい

「給料は、一般の従業員とほとんど変わりません。健常者以上に働いていると、社長も認めているのだと思います。この人たちが休んだら、健常者に代わりはできないと社長はよく言います」

会社に貢献しているから、それに見合った給料を払うのは当たり前ということで、最賃からスタートして、ほとんどの人が一七〜一八万円に。二〇万円を超える人が三人いる。年二回のボーナスと期末手当も出るし、社会保険関係も完備している。

「機械のさわってはいけないところは赤や黄色で印をつけていますが、社長が『ここは絶対さわるな』と言えば、絶対さわりません。これをしなさい、こうしてはいけないと言えば、きちんと守ります。健常者のほうが自分勝手に判断して、けがをする人がいるんです」

いままで、知的障害者の労災事故は一件もない。「親分」である社長の言ったことは絶対。常務の谷本さんにもその判

断を覆すことはできないそうだ。

「社長は、『うちに預けたら、正社員でみんな同じに扱う。長い間面倒をみているのだから、お母さんがいろいろ言いなさんな。私に任せなさい』と言いますが、『うちの子どもをやかましく叱る』と誤解する親もいます。理解のある親は、同じ条件で働かせていただいておりますね」と感謝して見守っていますね」

「迫力」の社長語録

取材が進むうちに、仮眠から起きた杉永社長が、かまぼこのすり身がついた作業着姿で席に着いた。組合の会合にも直前まで仕事をしていて、そのままの格好で飛び出して行くらしい。常務の谷本さんには「元銀行員」らしく、丁寧な応対をしていたのだが、社長は登場しただけですごい存在感だ。島原弁を交え、ま



長崎能力開発センター出身の浦道慎さん(25歳)。特技は和太鼓



社員とともに働く杉永社長(右)

「障害者は、好きで障害者になったわけではない。さずかりものとして捉えな」と言うから、いかにも障害者のような顔になる。うちに入社したからには、一切何も言うてくるな。俺がハンドルを握った以上は、隣でハンドルを握られては運転しにくか。二人で運転すると、本人がどっちについていいかわからん。まず親を育てることが必要」

前かけの紐の結び方から教えた人も、ひげ剃りから教えた人もいた。

「育つまでは、失敗するから材料を捨てる。その間は会社が損するから、いくら給料を下げていても、言われたことは着実に守る。この人たちがおらんと、会社は進めん。現場では、だれが障害者かはわからんよ。我々は現場で障害者に



明日の準備をする福芳栄治さん(29歳)。仕事は、一人残っても最後までやりとげる頑張り屋



杉永社長の信頼が厚い灰塚良夫さん(39歳)も大臣表彰されている

負けとるよ」
「十数人雇用するには、まわりの支えがなければできん」
「心を開いておるから、怒ることができる。ただ、怒ってばかりではダメ。ほめることも必要。怒られてばかりではたまらんもの」
「給料をもらうとき、両手でありがとうございますと言う人がほかにおるか？入社したら、死ぬまでの就職。定年は六〇歳だが、元気であれば、ずっと働いていい」
「みんな同じ。自分と一緒にだと思っ



機械の清掃作業をする永田忠司さん(27歳)



根気よく、弱音を吐かずに仕事をする高鍋博幸さん(23歳)

おります。ただ役が違うだけ。私は監督、あなたはピッチャー、セカンドというようにね」
障害者雇用にも、私たちの広報誌にも、辛口な意見をいただいた。
「写真？ どこでもどんどん写してください。見えるところを写されても、何も痛くない。技術の『術』は心の中にある。見えんところが大事。そのくらいの自信がなければ、戦いには勝てん」
話が一段落すると、あつという間に工場へ。一階から四階まで一時もじつとせずに、天ぷらを揚げ、箱詰めをし、使

やすいようにと機械の改善をしている。

おいしいかまぼこなら
どこにも負けない！

かまぼこづくりは、野菜を刻んだり、材料を整えたり、鍋に火を入れたり、油をわかしたりと、前日の夜八時半から仕込みが始まる。朝五時。できあがったすり身を揚げて、地元市場には揚げたてを並べる。遠方には冷凍、真空パックで輸送する。午後は製品の箱詰めが中心で、後は清掃作業だ。

知的障害者の勤務時間は朝七時から八時から夕方四時から五時まで。職種はさまざま、すり身の白の機械をまわす人、材料を所定の場所まで運ぶ人、箱詰めをする人と、かまぼこづくりのさまざまな製造過程にかかわっている。仕事は忙しい。
社長の一番弟子、灰塚良夫さんは勤続二十三年。朝五時すぎには出勤する。退職したときは家一軒ぐらい建つようにと、入社したときから社長が計画的に貯金している。

「良夫はすごい。我々にできんことを全部やっけてのける」と社長に言わせる灰塚さん、冷凍すり身を台車に乗せてニコニコと登場。一ケースが二〇キロ。右より硬くて、冷たいすり身を毎日平均二五〇ケース、トラックから業者が降ろすのを手伝い、工場の白場まで運んでくる。

工場内を一巡すると、社員と一緒に新製品「あじのひらひら」の箱詰め作業をする社長の姿があった。

「障害者は絶対ごまかさなない。障害者がつくれば安全」

狂牛病、偽装牛肉と「ごまかし」が問題化している企業に聞かせたい言葉だ。明日の材料が一品でも足りないと言葉が配送されてくるまで帰らない責任感がある人。書道が好きできれいな字を書く人、ボーリングで高得点を出す人、数を猛スピードで数えられる人、ジョークで周囲をなごませる人、いろいろな特技もある。



真空パック包装作業を進める田中賢一さん (31歳)



洗浄機を担当する山下厚さん(28歳)

「何が好き?」とみなさんに聞いてみると、竹輪、あげだし、そして、「みんなおいしい」と。

交代勤務のため、一同が集まったの催しなどはできない。自分たちで、ボーリング、カラオケ、パチンコに出かけている。諫早市の通勤寮から通う人以外は、市内から通勤してくるが、親が高齢化し、身寄りのない人も出てきている。

「今後は食堂などの厚生施設を充実させたいですね。住むところがなくなる人も出てきますので、寮母さんをおいて、社宅をつくりたいと社長と話をしています」



できあがったかまぼこを運ぶ貞方俊一さん(50歳)



サッカー・野球・空手とスポーツ好きな小林豊さん(21歳)。材料のすり身を準備する

谷本さんは、勤めてよかったと思う一人だ。

「思い切って違った仕事をしてよかったと思っています。一たす一が二になって、仕事はおもしろいですね」

たまたま乗ったタクシートの運転手が、「あそこのかまぼこはおいしいよ。使っている魚の量が違う」と。私はイワシバーグが気に入った。

かまぼこづくりにかける情熱。「知的障害者」との本気の付き合い。何よりも、杉永金生さんの迫力に圧倒された。

「いまも有限会社のままだが、内部留保は五億円と超優良企業だ。」

「新製品づくりをいつも夢見ている。夢を見ない人はダメよ。もっと不況になっても、ほんものは残る」と社長。飲み歩くこともゴルフもしない。かまぼこ一筋。夢の中でも、おいしいかまぼこをつくらせているとか。

「杉永の社長と出会ってよかった、ここに勤めてよかったというところまでないと、会社は成功ではないと思う。儲かっているから成功だとは言いたくない。」

商売がうまくいかないところは、社長が自分を見直すべき。初代が築いたことを忘れんと言いたい。うちも部分的には任せているけれど、最終的な責任は自分。仕事は、命がけでやらなければ」